

## テレビジョン・フォークロア

### — テレビ受像機の民俗学、その今日的意義と学問的系譜 —

飯田 豊

テレビ受像機が戦後、ある地域共同体のなかで普及していった過程を跡付ける試みを、本稿では「テレビジョン・フォークロア」と名付けた。この試みは、東京中心の放送史を相対化するための方途であり、戦後まもなくテレビ受像機との出会いを経験した世代が著しく高齢化している現状を鑑みれば、早急に取り組まなければならない研究課題である。モノに着目して地域共同体の変容を辿ることは、「テレビ」がデジタル化して以降、新しいテクノロジーをめぐる社会的調整のあり方を考察することにもつながる。

そして、こうした調査活動を裏打ちする学問的系譜として、(1) カルチュラル・スタディーズにおけるオーディエンス・エスノグラフィ、(2) 日本のテレビ研究における民俗学的、風俗学的アプローチ、(3) メディア研究に対する人類学からのアプローチという三つの方法論を取り上げ、それぞれを批判的に検討することを通じて、テレビジョン・フォークロアという試みの可能性を展望する。

[キーワード] テレビ、オーディエンス・エスノグラフィ、民俗学、風俗学、人類学、カルチュラル・スタディーズ

#### 1. はじめに

「テレビ」は戦後、地域社会の日常のなかに、いったいどのように溶け込んでいったのだろうか。日本のテレビ放送史はたいてい、黒山の群衆を路上に集めた街頭テレビ（1953年）を始原とし、受像機の普及を促したとされる皇太子成婚パレードの中継（1959年）などを節目として語られるが、実のところ、首都圏ではなく地方における普及のあり方は、決して体系的にまとまってはいない。

そこで本稿では、テレビ受像機が地域社会のつながりのなかで普及していった過程を、その痕跡とともに民俗学的に蒐集する試みを「テレビジョン・フォークロア (Television Folklore)」と名付けたうえで、こうした調査研究を実践することの今日的意義を論じるとともに、その学問的系譜を批判的に検討する。筆者は現在、備後地方（広島県東部）周辺において、テレビ受像機の普及過程に関する聞き取り調査を積み重ねており、その成果は追って公開していく予定であるが、こうした活動の意義や展望を本稿のなかで明確に示すことにしたい。

なお、本稿が「フォークロア」と銘打っているのは、伝統的な民俗学のパラダイムにのっとり調査研究を構想しているからではない。民間に伝承されてきた風俗や慣習、生活文化といった民俗資料が、近代化とともに滅失していったのと同じように、デジタル化、グローバル化、郊外化といった趨勢のもとで近年、草創期のテレビ受像機を取り巻いていた生活文化の残滓が急速に失われつつあることになぞらえた一種の隠喩である。マス・コミュニケーションのあり方じたいの変容を念頭に置いたうえで、日常生活の総体における「テレビ」という存在を、歴史的な次元から問い返していくための視座を精練させていきたいのである。

## 2. テレビジョン・フォークロアの今日的意義

### 放送文化の継承のために — 「街頭テレビ」と「ご成婚パレード中継」の神話を超えて

日本テレビは1953（昭和28）年、8月28日の開局に先立って、新橋駅西口広場や浅草観音境内、東急渋谷駅や京浜急行品川駅の構内など、山手線沿線の主要駅付近を中心とする55ヶ所の街頭に、およそ220台の受像機を設置し、黒山の人だかりを路上に集めたとされる。その人気を決定づけたのがプロレス中継。力道山は一躍、テレビを大衆化させた。新宿では群集によって足止めされた都電のガラスが割れるとともに、街路樹に登ってテレビを観ていた人が落下してしまった。中野の丸井本店では、売り場に置かれている受像機の前に集まった人びとの重みに耐えられず、床が抜け落ちるという事故が生じた。街頭テレビはその後も増設され、都心から遠く離れた新潟県柏崎、福島県会津若松、静岡県焼津といった地方にまで及んだという。

このように、街頭テレビが戦後の日本社会に与えた影響は、きわめて大きいものだった。『20世紀放送史』がいうように、「人々は、街頭テレビを通してテレビの魅力を知った。それに刺激された飲食店や喫茶店が、客寄せのためにテレビを据え付けるようになった」(1)。テレビ放送史に携わる研究者がしばしば依拠する、『人生読本 テレビ』(1983年)に収められた一般視聴者手記「私とテレビジョン 思い出の出会い」には、テレビ受像機が家庭に普及する以前、電器店以外にそれが置かれていた場所として、「せいぜいいくらかの入場料を支払って町のテレビ会館で時間制限つきの鑑賞を楽しむのがせきのやまだった」[傍点ママ](2)、「テレビの申し子ともいふべき『プロレス』を見るためには街頭テレビの前に陣取るか、テレビのあるそばや喫茶店で観覧料まがいの特別料金（飲食代+アルファ）を支払ってでなければ見られなかった」[傍点ママ](3)。この本に収録されている手記は、日本民間放送連盟が1982（昭和57）年、一般視聴者から集めた454通に及ぶ投書の中から選抜されたものである。

そして、テレビ受像機が急激に普及する引き金となったとされる出来事が、1959（昭和34）年4月10日に催された皇太子成婚パレードで、電通の推定によれば、そのテレビ中継を約1500万人が視聴したという。4月2日の『朝日新聞』は、「テレビ・セットにも結婚ブ

ーム。『どうせ買うなら、4月10日に間に合わせよう』と、テレビ・セットは羽の生えたような売れ行き」と報じている(4)。その影響力を強調する歴史記述は、枚挙に暇がない。たとえば、

テレビ登録世帯数は、三十三年四月に一〇〇万を突破、皇太子ご成婚の一週間前の三十四年四月三日に二〇〇万と倍増し、同年一月には三〇〇万に急増した。だからミッチー・ブームでは、テレビはまだわき役、むしろこのブームのおかげで急成長できたといえる。(5)

しかし、テレビ受像機が当初、電器店でいかに媒介されて売られたかに着目した飯田崇雄は、こうした国家イベントを普及過程の節目として強調し過ぎることの陥穽を突いている。すなわち、「あまりにもイベントの特別性を強調し過ぎることで、日常的に電器店でテレビジョンが買い求められ、社会に広がっていくプロセスは無視されてきた」というのである(6)。

『人生読本 テレビ』には、電器店にまつわる証言が多く登場する。たとえばこの当時、小さな電気店を経営していた父親が、手作りの受像機を店頭設置していたことを回顧している女性の手記は、次のようなものである。

そのテレビは小さなウインドから画面を外にむけて置かれた。まだテレビの珍しい時代だったから、通る人は立ったままでテレビを見ている。子供番組がはじまると近所から子供が集まってくる。人気番組になると椅子をもって集まってくるし、私も店の椅子を持ち出し、一緒に座ってテレビを見る。父は店の前に人だかりができるのが得意であるし、私も、いじめっ子が隣でおとなしくすわっているのがうれしかった。白黒テレビもそれからは次第に広まったように思う。(7)

次のような証言もある。

私がテレビをはじめて見たのは、もうかれこれ三十年近く前のことになります。[...] まだラジオの時代で、家庭にまではテレビが普及していなかった頃、町の電気屋さんの店先で見たこのテレビは、幼い私にとってはときめきの出会いとでも言えるのでしょうか。それと同時に、あの時の心配顔の電気屋のご主人の顔が、不思議と、はっきり思い出されるのです。そして当時、電気屋の店先はいつも黒山の人だかりだったことが、なつかしく思い出されます。(8)

また、かつて仙台に住んでいた女性は、「東一番丁の電気屋さんの前にやぐらをたて、機か

いをのっけて、試験的に、写して見せ」ていた様子を、友達と見に行ったという(9)。

戦後社会において受像機の普及を強烈に後押ししたとされる、皇太子成婚パレードという国家イベントに比べて、こうした歴史的事実が、テレビ放送史のなかで言及されることはきわめて少ない。とりわけ、首都圏をはじめとする都市部ではなく、地方におけるテレビ受像機の普及については、資料がきわめて乏しい。ただ、『人生読本 テレビ』に掲載されたいくつかの手記は、この当時、いわゆる「世間」のまなざしが複雑に交錯しつつ、全国各地でテレビが根付いていったであろうことを示唆している。

戦傷で病弱だった父は、思うに任せない自分の肉体が口惜しくて仕方ないのだろうか、気短かによく手をあげた。

働く事も出来ずに収入のない一家の暮らし向きを今から思うと言葉にはつくせない。

勿論、昭和三十五、六年と云えば、何処の家庭もそう贅沢な物は食べていない。が、とり分けても吾が家の食卓はひどいものであった。米よりも麦の割り合いの多い飯、お菜といえ葱の味噌汁、うんと辛い沢庵漬、それもあれば良い方で、醤油をかけたり、生味噌をまぶしたり……。

当時、村で分限の三、四軒が、漸々テレビを買ったと。

「いつでも見においで……。」

もの珍しさと、気恥ずかしさとが交錯する中を、八つと五つに成る弟と連れだって、文明のテレビなるものを見に行った。しかしその後は分別が先に立って、見たさを压えそれきりおいそれとは見に行けない。[傍点ママ] (10)

田舎町ではまだテレビのある家は少なく、人より早く持てる誇らしさや、またスイッチがひねるのでなく新式のボタンスイッチなのが、秘かに自慢であった。

テレビを持つという事で、ひどくモダンな高級な暮らしになる様で、晴れがましい気持ちであった。

[…]

あの頃は、まだ隣近所にテレビがなくて、家にテレビを置いてからは、よくテレビのお客様ががあった。お茶やお茶菓子が出され、思いがけない時間にお相伴でおやつにありつけるので、子供の私としては心より大歓迎であった。(11)

こうした普及の回路を詳らかに明らかにすることは、首都圏で黒山の群衆を集めた街頭テレビを始原とし、皇太子ご成婚パレードのテレビ中継が受像機の普及にとって大きな節目だったと措定する、東京中心の放送史を批判的に相対化する契機となる。草創期の「テレビ」がこうして、同時代の人びとの生活に編入され、接合していこうとする過程における、多様

な論理や利害の軌跡を明らかにしていくことは、これからの重要な研究課題である。放送文化の保存と継承という観点からみても、戦後まもなくテレビ受像機との出会いを経験した世代が著しく高齢化している現状を鑑みれば、早急に取り組まなければならない作業である。

### デジタル時代における「テレビ」のあり方を構想するために —普及理論を超えて

しかしテレビジョン・フォークロアは、放送文化の保存や継承のみを目的とする調査研究ではなく、これからの「テレビ」のあり方を展望する活動でなければならない。

テレビのデジタル化が不可避に進行している現在、その周知が徹底していないことや、受信環境の整備が進んでいないことなど、放送政策の問題点が指摘されている。とりわけ地方においては、地上デジタル放送の開始時期が遅く、アナログ放送からの移行期間が短いことも相まって、高齢者や低所得者にとっては深刻な問題である。しかし、地上デジタル放送の受容や受像機の購買のあり方は、定量的な普及理論によってのみ分析されるべきものではない。

飯田崇雄が指摘しているように、戦後における受像機の普及にさいしては、商店街の電器店によるPR、集会所での集団視聴、町内会長や分限者といったオピニオン・リーダーの存在など、地域社会のつながりが決定的に重要な意味を持っていた(12)。こうした地域共同体を、日本に限っては「世間」と称することが多い。われわれが生きる地域共同体のダイナミズムは、時代とともに変容しつつも今まで息づいている。

地域共同体の今日の変容を突き詰めると、全国各所にみられる郊外化現象との関連が問われなければならない。三浦展は「ジャスコ化」、「ファスト風土化」といった挑発的な造語とともに、郊外化する地域社会の流動性を問題化している(13)。三浦の示唆が的を射ているとしても、これを裏付ける実証研究が圧倒的に乏しいことは否定できないが、若者論や格差社会論などとの接点もあり、あえて(実証性を欠いていることを覚悟の上で)地方の「ジャスコ化」に言及する論者は少なくない(14)。

テレビ受像機の購買行動に限っていえば、たとえ地方の農村地域であっても、消費の舞台が商店街の電器店から国道沿いの大型量販店へと移行していることは明らかであり、テクノロジーの普及過程はかなり平準化している。したがって、中央と地方、都市と農村の対比は、単なる情報格差や経済格差の問題としてだけではなく、郊外化現象に対する適応のあり方の問題として捉え返されなくてはならない。

「テレビ」がデジタル化して以降、新しいテクノロジーをめぐる社会的調整のあり方、それが可能にするコミュニケーションのあり方が、いったい今後どのように変わっていくのかということは、われわれを取り巻く地域共同体の変容を足掛かりとして考察することができるだろう。ハーバーマスにならえば、「社会システム」の複雑化にともない、個々人のコミュニケーション的行為にもとづいて再生産され続けている「生活世界」のあり方も、変化を余

儀なくされているのである (15)。

### 3. テレビジョン・フォークロアの学問的系譜

#### カルチュラル・スタディーズにおけるオーディエンス・エスノグラフィ

オーディエンスが「テレビ」を消費する現場に照準するアプローチとして、これまでに厚みのある研究成果を蓄積しているのは、カルチュラル・スタディーズにおけるオーディエンス研究の民族学的転回、すなわち、オーディエンス・エスノグラフィの系譜に他ならない。

「利用と満足 (use and gratification)」研究をはじめとするアメリカ型の社会心理学的なマス・コミュニケーション研究が、オーディエンスのあり方を一義的かつ受動的に捉えるあまり、社会的ないしは歴史的な文脈をさほど考慮していないことを、カルチュラル・スタディーズの批判的受容理論が問題化したことはよく知られている。80年代以降、デヴィッド・モーレイやイエン・アングらによって進められたオーディエンス・エスノグラフィは、メディア・テキストを基軸としてその影響や効果の現れ方を明らかにするのではなく、オーディエンスの身体性や記号消費の仕組みを、人びとが生きる日常生活に内在するかたちで捉えていった。

ただし、彼らが批判した「利用と満足」研究が示した知見のなかには、今日におけるオーディエンス研究の文脈からみて、きわめて重要なことがらが含まれていた。よく知られているように、ポール・ラザーズフェルドらが提示した「コミュニケーションの二段階の流れ (The two-step flow of communication)」仮説は、メディア・メッセージから直接的に受ける影響よりも、それぞれの共同体における成員どうしの社会的関係、他の成員に対して大きな影響力を持っているオピニオン・リーダーの存在をクローズアップした (16)。ここにはモーレイらが析出した「能動的なオーディエンス (active audience)」という概念の萌芽がある。毛利嘉孝が言うように、「このオーディエンスは、単に新聞やラジオを視聴しているだけの人々ではなく、実際に身体を持ち、さまざまな文化的・経済的・社会的諸関係の中にメディア以外にも組み込まれた複雑な総体」であり、「本来オーディエンスの狭義の定義であるメディアの視聴者という要素が後退しているのである」(17)。本稿の文脈においても、この視点は非常に重要である。

さて、テキストの意味解釈のみを重視するジョン・フィスクらのオーディエンス認識を批判するモーレイ (18) は、『ファミリー・テレビジョン』(1986年)のなかで、数世帯の家庭空間におけるテレビ受像機の利用について、家族成員に対するインタビューをもとに解釈することによって、日常的経験のなかでジェンダーが構造的に作用していることを明らかにした (19)。ロジャー・シルバーストーンやリン・スピーゲルもまた、日常生活に埋め込まれたテレビ視聴を空間論的に分析し、それが階級やジェンダーなどをいかに媒介し、個人や家族

のあり方を規定しているのかを論じている(20)。シルバーストーンは「馴化(domestication)」という概念を用い、テレビが使用される状況や付置の構成的な役割、テキストが存在する社会的かつ物質的条件が生産される過程へと、批判的受容理論の照準を移動させていった。

カルチュラル・スタディーズが提起した問題意識、オーディエンス・エスノグラフィの研究手法は、日本のテレビ研究においても応用展開されており、本稿がテレビジョン・フォークロアと呼んでいる調査活動においても継承されるべきものである。

ただし、課題もある。カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズムはこれまで、近代人類学における民族誌のあり方に批判的なまなざしを向けてきたが、後ほど詳しく述べるように、その告発を真摯に受け止めた批判的人類学が取り組んでいるほどには、オーディエンス・エスノグラフィの事例研究は、少なくとも日本において、実証的な方法論が十分に深化されているとは言い難い。

### 日本のテレビ研究における民俗学的、風俗学的アプローチ

カルチュラル・スタディーズにおけるオーディエンス・エスノグラフィの潮流とは異なる系譜にありながらも、こうした問題意識を共有しているアプローチを、日本のテレビ研究のなかに見いだすことができる。

日本のテレビ研究も従来、アメリカ型の社会心理学的なマス・コミュニケーション研究の理論に負うところが大きく、実証主義的な研究手法を前提とするものが圧倒的に多かった。そんななか、『テレビ時代』(1958年)や『見世物からテレビへ』(1965年)などによって、新しい映像表現媒体としてのテレビの可能性を論じた加藤秀俊は、これらの著作に先立って1955(昭和30)年、奈良県の二階堂村という村落で、三世代家族に対する参与観察をおこない、家族集団におけるマス・コミュニケーションの受容過程について民族誌的な分析をおこなっている(21)。その後、藤竹暁をはじめ、北村日出夫、中野収、山本明、井上宏らによって展開された、大衆消費社会論の言説にもとづくテレビ研究のなかでも、テレビ受像機を受け入れる「茶の間」のあり方を詳細に分析した論考が少なくなかった。

水越伸は、大衆消費社会論としての放送論のパラダイムが、カルチュラル・スタディーズにおける能動的オーディエンスや記号論的民主主義といった議論を先取りしていたことを評価する一方、80年代以降のメディア環境の変化とともに、こうした放送論の言説が土台を失い、明らかな限界に直面したことを詳細に論じている(22)。このことと軌を一にして、テレビ研究のメディア論的転回とでもいふべき事態が進み、そのひとつの潮流として(23)、モノ＝物質文化としてのテレビに照準する研究が台頭してきたのである。

既に述べたように、飯田崇雄は、松下電器の系列電器店「ナショナルショップ」に配布されていた販促誌を分析することを通じて、テレビ受像機の「売られ方」に着目し、その普及過程を微視的に描写している。そして飯田は、民具研究で知られる民俗学者の宮本常一に

ならい、「テクノ・フォークロア」という概念を提唱している。宮本が民具を通じて「文化とか技術とかを明らかにしてゆくこと」(24)を目指したように、テレビ受像機というモノを通じて、生活文化の総体のなかで「テレビ」を捉え返そうとしたのである(25)。ただし、飯田がおこなった調査研究は、あくまで販促誌の言説分析にとどまっており、当事者の生の声を拾っているわけではない。

それに対して、武田安恵は、千葉県松戸市の常盤平団地においてテレビ受像機が広まっていった過程を、綿密な聞き取り調査によって明らかにしている。飯田崇雄が着目した電器店と地域住民とのコミュニケーションを含めて、団地の共同体のなかで受像機が流通していったプロセスを、武田は緻密に描写している。単なるインタビューにとどまらず、往時の茶の間のイラストを描いてもらうなど、アクション・リサーチとしてのワークショップを取り入れた武田の研究手法は注目に値する。「間取り」や「ちゃぶ台」といった慣習と、テレビ受像機がそれらにもたらした革新のありようを、武田は住民の声にもとづいて再構成しているのである(26)。農村や民間生活のなかに問題意識を見出した民俗学に対して、武田は、都市に研究対象を求めた風俗学的調査の可能性を追究している。この差異については本稿の最後に検討したい。

### メディア研究に対する人類学からのアプローチ

「都市の学」としての風俗学、「農村の学」としての民俗学に対して、非西欧諸国をはじめとする異文化に研究対象を求めたのが、人類学のパラダイムであった。

文化人類学が従来、テクノロジーやメディアを研究対象とすることは稀であったが、科学的な説明のみに還元できないこれらの問題を考えるにあたって、近年、人類学のアプローチが有効であることを重視する議論を散見することができる。たとえば、宮武公夫は『テクノロジーの人類学』のなかで次のように述べている。

テクノロジーは科学の領域を超えて広がり続け、科学の手から滑り落ちているのに、われわれは多くの問題を科学のブラック・ボックスへと投げ入れ続けているのだ。人類学者たちは、西欧の知の体系を具現化した科学技術とは無縁の、呪術や宗教までを含めた伝統社会独自の技術があることを教えてくれてきたはずである。しかも、呪術・宗教・科学という近代の図式の中では、「進歩」の過程で消滅するはずの伝統社会の技術は、現代においてもその姿を変容させながら、神秘的なそのままの姿で生き続けている。宗教や呪術は現代世界の表舞台から姿を消しても、宗教的・呪術的なテクノロジーがなくなることはないだろう。(27)

「伝統社会独自の技術」のあり方を詳らかに明らかにしようという文化相対主義的な姿勢



は、先に述べた民俗学的、風俗学的なアプローチと通底しており、ここで改めて特筆することはないだろう。それに対して、今日の人類学者にとってきわめて重要な関心事となっているのが、フィールドに対する自らの関与の仕方である。すなわち、ジェイムズ・クリフォードらが『文化を書く』のなかで鋭く提起したように(28)、80年代以降、人類学者によって書かれた民族誌の不透明性が問題化され、いわば、研究の対象となった人びとに対するアカウンタビリティのあり方が厳しく問われているのである。

ところが、このことがかえって、メディア研究としての人類学にきわめて重要な視座を提供してくれる。飯田卓によれば、

メディア研究の専門家でさえ手を焼きそうなめまぐるしい変化のなかで、人類学者をはじめとするフィールド研究者は、いったい何を発言できるだろうか。実は、社会科学分野のフィールド研究は、ある種のメディア実践に他ならない。すべての学問は、活字印刷によるマスコミュニケーションをとおして変化するメディア現象なのかもしれないが、フィールド研究は、それ以上の意味においてメディア的性格を持っている。ひとことでいけば、フィールド研究の成果は研究者と読者とを橋渡しするだけでなく、研究の対象となった人びとと読者をも橋渡しする。つまり、フィールド研究自体がメディアの役割を果たすのである。(29)

人文社会科学全般に生じたポストモダンの転回によって、自らが依って立つ学問領域に対する反省性＝再帰性(reflexivity)が問題化されるなかで構想されてきたのが、批判的人類学の潮流である。原知章は批判的人類学にもとづくメディア研究、あるいはメディア実践のあり方を、「再帰的な人類学的実践」と呼んでいる(30)。

飯田卓や原が言う「メディア実践」とは、水越伸らによって提唱されている概念を踏まえたものである(31)。すなわち、

メディア論全般を見渡しても、研究者がメディアの現場の力学や実践的な活動から切り離れ、現象や状況をきれいに整理していくことが、果たして学問的に生産的なことなのか。メディアをめぐる分析的な語りにおいて、語る者は完全にそれが語られるメディア論的状况の外側に立つことはできない。この点を突き詰めていったときに、理論と実践、歴史と現在を連結させ、その共犯的関係に覚醒したメディア論のあり方として、メディア・プラクティスを捉えていこうという考え方が浮上してくる。(32)

こうした前提を踏まえて水越は、日本におけるメディア論の系統を俯瞰したうえで、これまで手薄だった領域のひとつとして、人類学的アプローチの重要性を指摘している。言うま

でもなく、既に述べたオーディエンス・エスノグラフィがそれに相当するが、カルチュラル・スタディーズを発祥とする人類学的アプローチは、マス・コミュニケーション研究が武器としている定量調査の分析記述に比べて、実証的な方法論をいまだ十分に深化させることができていないというのが水越の見立てである(33)。「これまでのカルチュラル・スタディーズは、研究者が対象に内在しつつ研究を進めるといいつつ、その際に生じる対象との密接な関わり、そこから立ち上がる研究者や研究の政治性の扱い方に関して、伝統的な人文社会系の知の伝統から逃れることが十分にできては」おらず、「運動はするが、実践研究には向かわない」(34)。

従来のオーディエンス・エスノグラフィを乗り越えるための方向性として、水越はまず、子どもから大人への発達過程、人間がメディアとの関係性を学ぶことを通じてリテラシーを身につけていく過程に配慮することの重要性を挙げている。

人間はあるメディアに、生涯のある時期に特定の場所で出会い、周囲の人間の振る舞いや、地域的、歴史的な文化規範の影響を受けながら、一定の関係性を結んでいく。それは書物や筆記具のような伝統的で当たり前の道具であれ、携帯電話のような目新しく変化しやすい道具であれ、同じことである。(35)

そして、もうひとつの方向性として水越が挙げているのは、カルチュラル・スタディーズがこれまで主として、メディアの受容と消費の現場に焦点を当ててきたのに対して、メディアの表現や情報生産の現場を捉えた調査研究を深化させることである。

受容と消費のダイナミズムは、情報技術の革新、メディア企業の動向、国家のメディア政策を背景として成り立つメディア表現と情報生産の実態との連関のなかでとらえられなければ、十分に把握はできない。デコーディングのプロセスをエンコーディングのプロセスとの循環性のなかでとらえていかなければならないのである。メディアに媒介されたコミュニケーションの総体像をとらえるためには、さらにそのあり方を積極的に組み替えていく企図のためには、表現と生産の研究が展開される必要がある。(36)

このことについて、初期のカルチュラル・スタディーズの知見を参照しておこう。レイモンド・ウィリアムズは、「出版を通じた書字から活字への発展、あるいは映画、ラジオ、テレビへと至る発展など、新しい『メディア』と見なされたものについての技術的側面に特化した研究」が、「往々にして一般的な生産力や社会関係・社会秩序から相対的に切り離されている」一方で、「オーディエンス」や「公衆」に照準する社会史は、「詳細な事実を集めはするものの、基本的に『消費』という観点からなされ […] より一般的な社会的組織の形式でも

ある消費の様式と、技術的であると同時に社会的な特定様式との、常に重要で、時には決定的ですらある関係については理論的發展をなしえない」ことに懸念を抱いていた(37)。そして実際、その後のテレビ研究においては、たとえば受像機に対する分析を例にした場合、装置が生産される局面に関心を向ける技術史的研究と、家庭における装置の馴化、それにとともなう「近代的家庭」の変質を焦点化する批判的受容理論の蓄積とは、互いに分断されてしまっている。

メディアの実践研究をおこなう今日的意義のひとつは、その送り手と受け手を結びつけ、情報の生産と消費、表現と受容の循環を引き起こすことにある。送り手と受け手が厳然と乖離しているマス・コミュニケーションにおいては、それでもなお、双方が互いに結びつき、表現と受容の循環を回復していくような営みが、たとえわずかでも必要なのである(38)。

こうした学問的姿勢を採るにあたって、今日の人類学が乗り越えなければならない問題系と著しく接近する(39)。すなわち、宮武公夫が言うように、「『住民』の視点に立ったり、厚く記述された『テキスト』を書く『方法』としてだけではなく、人類学者が生きた対象についての感覚を拡大し、それと関与する」ための方法が問題となるのである(40)(41)。

本稿が提起するテレビジョン・フォークロアという営みが、これからの「テレビ」のあり方を展望する活動でなければならないことは既に述べた。そのさい、「テレビ」の送り手と受け手の関係性を実体的に捉えるのではなく、より望ましいあり方に組み替えていく可能性を模索する実践志向のもとで、それを進めていく必要がある。

#### 4. おわりに

武田安恵は、飯田崇雄が提唱した「テクノ・フォークロア」という概念の有効性を大いに評価する一方で、「民間社会に残存している古風な習慣」[傍点ママ]を意味する「フォークロア」という言葉を援用することの限界を指摘している。

宮本が「フォークロア」という言葉を用いたのは工芸品、民具といった土着の技術に対してである。宮本の示唆の中に、「テクノロジーの持つ社会性は無視できない」といった意味を見出すことは出来ても、「そのテクノロジーの生まれた時代や場所、地域性」が内包されているとは必ずしも限らない。それは家電製品が消費を前提とし、大量生産をベースにして展開されている工業製品であるがゆえの特性であり、家電というモノが日本において均一の、ナショナルな空間を形成するのに寄与したものである事実を抜きにして語れないことと極めて密接な関係を持つ。[...] 家電製品という物質の形態そのものに、「フォークロア」というコミュニティのあり様や地域性を求めること自体限界があるのである。(42)

テクノ・フォークロアという概念を批判的に検討する武田は、風俗学の系譜を（隣接領域である民俗学や考現学の系譜と比較検証したうえで）詳細に辿ることによって、郊外団地の地域共同体におけるテレビ受像機の普及様態を、その生活意識に寄り添いながら明らかにしている。

都市に研究対象を求めた風俗学の系譜を踏まえた武田に対して、筆者が進めている調査研究においては、その概念上の限界を認識しつつ、あえて「テレビジョン・フォークロア」という呼称を用いることにした。その根拠をふたつ挙げておきたい。

第一の根拠は、言うまでもなく、フィールドの違いに由来する。武田が首都圏の郊外団地、すなわち狭義の郊外における事例研究を進めたのに対して、筆者は、地方の都市部だけでなく、農村部までを射程に入れて、地域社会のつながりのなかでテレビ受像機が普及していった過程を再構成するのを感じている。既に述べたように、従来の放送史が十分に目配りできていない周縁的な地域において、戦後まもなくテレビ受像機との出会いを経験した世代が高齢化し、草創期のテレビを取り巻いていた生活文化の残滓が急速に失われつつある現状を踏まえると、放送文化の保存と継承という観点からみて、早急に取り組むべき研究課題だからである。

そして第二に、草創期のテレビ受像機を取り巻く生活文化のありようには、工芸品や民具を通じて解明できる文化事象と同じく、民俗学的な資料価値がともなっていることを指摘できる。武田が整理しているように、「農村の学」と言われる日本民俗学が、生活のなかの古風な慣習や伝承のような、どちらかといえば変わりにくい文化事象を、そこから一定の距離感を置いた観察者が取り扱うのに対して、風俗学は、都市の日常生活のなかで移ろいやすい事象を、モノに即して内在的に捉えようとする学問である(43)。テレビ受像機が大衆消費社会の「商品」であって、工芸品や民具と比べて移ろいやすいことは言うまでもないが、その反面、およそ半世紀のあいだ、その形態が一度たりとも激変しなかったという事実は重要である。モノの次元において、「テレビ」は20世紀後半を通じて、ほとんどの場合、ブラウン管によって電気信号から画像を再現する機械のことを意味してきた。しかし近年、液晶やプラズマといった薄型テレビの普及、あるいはホームシアターの人気にともない、ブラウン管はあっという間に、すっかり過去の技術方式になってしまった(44)。これまでテレビ受像機を取り巻いていた生活文化のありようは、とりわけ地方においては、容易に動揺するはずのない「古風な習慣」と信じられていた。デジタル化、グローバル化といった趨勢にさらされている今日、それが急速に失われつつあるという現状を直視したいのである。

【謝辞】

本稿は、平成 20 年度公益信託高橋信三記念放送文化振興基金の助成を受けた研究課題「テレビ受像機の民俗学 —備後地方における放送文化の保存と発展に向けて」、平成 20 年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手スタートアップ）の助成を受けた研究課題「科学技術コミュニケーションの歴史社会学 —科学技術社会論とメディア論の接合に向けて」の研究成果の一部である。

注：

- (1) 日本放送協会編『20 世紀放送史』（日本放送出版協会、2001 年）374 頁。
- (2) 河出書房新社編『人生読本 テレビ』（河出書房新社、1983 年）46 頁。
- (3) 河出書房新社編、前掲書、51 頁。
- (4) 『朝日新聞』（1959 年 4 月 2 日号）。
- (5) 志賀信夫『昭和テレビ放送史（上）』（早川書房、1990 年）220 頁。
- (6) 飯田崇雄「『モノ＝商品』としてのテレビジョン」日本放送協会放送文化研究所編『放送メディア研究 3』（丸善、2005 年）122 頁。
- (7) 河出書房新社編、前掲書、42 頁。
- (8) 河出書房新社編、前掲書、212 頁。
- (9) 河出書房新社編、前掲書、146 頁。
- (10) 河出書房新社編、前掲書、57-58 頁。
- (11) 河出書房新社編、前掲書、141 頁。
- (12) 飯田崇雄、前掲論文。
- (13) 三浦展『ファスト風土化する日本 —郊外化とその病理』（洋泉社新書 y、2004 年）。
- (14) たとえば北田暁大は、東浩紀との対談のなかで次のように語っている。「『古きよき、ひとのきずなを残す地方』なんていうのはまったくの幻想で、便利な郊外型量販店ができれば、田舎の人もバツと飛びつくんです。地域共同体というのは、ジャスコ的なものに対する防波堤にはなりえません。結局、都市の記号性も、地域共同性も、郊外的なものに対して脆弱であらざるをえない。いかに記号的に『おしゃれ』に構成された都市であっても、来訪するひとびとの流動性が高ければ、つまり——宮台さんの言えば——『入れ替え可能性』が高ければ、基本的には郊外化せざるをえないし、地域共同性も『入れ替え可能性』を高める郊外的施設に抗うことはできない」。東浩紀・北田暁大『東京から考える —格差・郊外・ナショナリズム』（日本放送出版協会、2007 年）157-158 頁。

- (15) ユルゲン・ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論（上・中・下）』河上倫逸・藤沢賢一郎・丸山高司訳（未来社、1981=1985-87年）。
- (16) Paul Lazarsfeld, Bernard Berelson and Hazel Gaudet *People's Choice How the Voter Makes Up His Mind in a Presidential Campaign*, Columbia University Press, 1944=1988. = 『ピープルズ・チョイス —アメリカ人と大統領選挙』有吉広介・時野谷浩ほか訳（芦書房、1987年）。
- (17) 毛利嘉孝「オーディエンス研究の現代的地平」小林直毅・毛利編『テレビはどう見られてきたのか —テレビ・オーディエンスのいる風景』（せりか書房、2003年）213頁。
- (18) David Morley and Charlotte Brunson *The Nationwide Television Studies*, Routledge, 1999.
- (19) David Morley *Family Television: Cultural Power and Domestic Leisure*, Routledge (New Edition), 1988.
- (20) Roger Silverstone and Eric Hirsch *Consuming Technologies*, Routledge, 1992.  
Roger Silverstone *Television and Everyday Life*, Routledge, 1994.  
Lynn Spigel *Make Room for TV: Television and the Family Ideal in Postwar America*, University of Chicago Press, 1992.
- (21) 加藤秀俊「ある家族のコミュニケーション生活 —マス・コミュニケーション過程における小集団の問題」『思想』（岩波書店、1958年2月号）。
- (22) 水越伸「ここに可能性がある —市民との回路をつなぎ直す」『世界』（岩波書店、1999年5月号）。
- (23) 吉見俊哉による次の主張は、テレビ研究のメディア論的転回というべき事態の内実を端的に言い表している。「メディアとしてのテレビの分析は、単に映像を構造分析すれば済むものでもないし、放送の歴史や機能を検証していけばいいわけでもない。あるいは『家電としてのテレビ』が購入されていく社会史を詳しく調べたとしても、テレビの一面を捉えることにしかならない。テレビというメディアの文化力学を捉えるには、何らかの社会的な空間に配置される装置としてのテレビとその象徴的な意味(テレビ=装置)、一日の生活のリズムと連動する時間割としての放送(テレビ=時間)、そして特定の時間意識や記憶の構造に従って物語を表象し、重層的にせめぎあう諸主体の解釈行為の場となっていくテキスト(テレビ=番組)の相互に絡まりあったプロセスを、具体的かつ理論的に捉えなおしていかなければならない」。吉見俊哉「テレビが家にやって来た —テレビの空間 テレビの時間」『思想』（岩波書店、2003年12月号）45頁。
- (24) 宮本常一『民具学の提唱』（未来社、1979年）10頁。
- (25) 飯田崇雄『〈モノ=商品〉としてのメディア —テレビジョン受像機の社会的受容史』（東京大学大学院人文社会系研究科社会情報学専門分野修士論文、2002年）。

- (26) 武田安恵『「団地」と「テレビジョン」 —1960年代、テレビ受像機をめぐる風俗学的考察』（東京大学大学院学際情報学府修士論文、2006年）。
- (27) 宮武公夫『テクノロジーの人類学』（岩波書店、2000年）7-8頁。
- (28) James Clifford and George Marcus *Writing Culture: the Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press, 1986. = 『文化を書く』春日直樹・橋本和也・西川麦子・足羽与志子・多和田裕司・和邇悦子訳（紀伊國屋書店、1996年）。
- (29) 飯田卓「電子メディアを飼いならす」飯田・原知章編『電子メディアを飼いならす —異文化を橋渡すフィールド研究の視座』（せりか書房、2005年）13頁。
- (30) 原知章「再帰的な人類学的実践としてのメディア研究」飯田・原編、前掲書。
- (31) 飯田卓たちがどちらかといえば、「メディアに媒介された社会的実践、身体的実践」という広い意味合いでこの概念を用いているのに対して、水越たちが強調しているのは、「グローバル情報化のもとで精緻に体系化され、管理されることで巧妙に環境化したメディア状況を積極的に組み替える、編み直す、デザインするといった志向性を持った活動全般」に介入していく学問的態度である。水越伸・吉見俊哉編『メディア・プラクティス —媒体を創って世界を変える』（せりか書房、2003年）10頁。
- (32) 水越・吉見編、前掲書、12頁。
- (33) 水越伸「メディア・プラクティスの地平」水越・吉見編、前掲書、30-31頁。
- (34) 水越伸「MoDe と批判的メディア実践」水越編『コミユナルなケータイ —モバイル・メディア社会を編みかえる』（岩波書店、2007年）63頁。水越は次のようにも述べており、スチュアート・ホールたちが担った初期のカルチュラル・スタディーズを特徴付けていた実践性を、近年のそれが著しく喪失していることを厳しく批判している。「二一世紀に入り、この思潮は急速に大衆化すると同時に、それがつねに持ち合わせていた批判性や抵抗性のみならず、現象や文化の現場に大胆に関わっていく実践性をも失いつつありはしないだろうか。国家、民族、ジェンダー、メディアなどといった『領域』、マイノリティによる抵抗の、あるいは自律的な『営み』、それらをインタビューや人類学的方法で探り、記述する『方法論』、それらの組み合わせによって体制から相対的、かつ一時的に自律した人々の営みを発見し、評価するという『結論』。これらの研究上の要素の結びつきに一定のパターンが確立されてしまい[...]すでにいつかどこかで聞いたような議論の展開にのって扱われているとはいえないだろうか。そうした既視感が、批判性や抵抗性、実践性の切っ先を丸くしていつてしまっているのである」。同、62頁。
- (35) 水越伸「メディア・プラクティスの地平」、31頁。
- (36) 水越、前掲論文、27頁。
- (37) Raymond Williams “Means of Communication as Means of Production”, in *Problems in Materialism and Culture*, Verso, 1980. = 「生産手段としてのコミュニ

ケーション手段」小野俊彦訳、吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』（せりか書房、2000年）。

- (38) 東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編『メディアリテラシーの道具箱 —テレビを見る・つくる・読む』（東京大学出版会、2005年）。
- (39) 「メディア表現、生産の研究と、人類学的手法の間には、密接な関係がある。またどちらも一朝一夕にできるわけではなく、時間をかけ、地道な努力を重ね、試行錯誤をくり返しながらすすめられることではじめて可能になる。ある意味で職人芸的な知的営みだという点でも一致している」。水越、前掲論文、32頁。
- (40) 宮武、前掲書、207頁。
- (41) こうした問題構制は、科学技術社会論（Science, Technology and Society）と前提を共有するものであることを付け加えておきたい。よく知られているように、科学は論理的に首尾一貫し、客観的な実在を反映した確証的知識であるという考え方と決別して、80年代以降の科学論においては、トーマス・クーン『科学革命の構造』（1962年）の強い影響下で、科学の社会的構成が論議されてきた。こうした動向は技術論とも深く関わりながら、科学や技術の柔軟性が論じられ、その「相対化」が（時として過剰に）試みられてきたのである。このような議論を踏まえて、科学技術をめぐる専門家と非専門家のコミュニケーションは、多くの分野で近年、専門家の研究開発活動の成果を非専門家が理解するという送り手／受け手の関係——いわゆる「欠如モデル」——ではなく、研究開発段階から非専門家が、専門家共同体の意思決定や方向付けに参画していく相互作用的な関係が求められている。さまざまな科学技術が日常生活のあらゆる領域に浸透している現在、われわれとの望ましい関係をデザインしていくためには、その生産と消費の相互作用、専門家と非専門家の交渉が不可欠である。しかし今日、科学技術のブラックボックス化にともない、そうしたコミュニケーション回路は皆無に等しい。
- (42) 武田、前掲論文、44頁。
- (43) 武田、前掲論文、31-32頁。
- (44) 「テレビ」を取り巻く近年の地殻変動は、その草創期から今日までを改めて丹念に見通すことで初めて、より広い歴史的構図のなかに位置付けることができる。飯田豊『テレビジョン』の系譜学 —『放送（局）史』を相対化する技術社会史からのアプローチ』日本放送協会放送文化研究所編『放送メディア研究4』（丸善、2007年）。



**Television Folklore**  
**- Its Contemporary Issues and Academic Genealogy -**

Yutaka Iida

In this paper, I named “Television Folklore” the research of the spreading process of television sets in local communities in the postwar period. My research is a way to relativize the history of broadcasting focused on Tokyo, and it has to be conducted fast, because the people who have witnessed the spread of television sets are aging. The ways of domestication of new technologies after the start of the digitalization of television are also related to the transformation of local communities which focus their attention on materials.

The disciplines that provide the academic backup of my research activities are:

- (1) audience ethnography in cultural studies;
- (2) folkloristic approach of the television studies in Japan;
- (3) anthropological approach of media studies;

I prove the possibility of existence of Television Folklore, by a critical examination through the use of these three methodologies.

[Keywords] Television, Audience Ethnography, Folklore, Anthropology, Cultural Studies